

＜書 評＞

高松鶴吉 著

もう一つのカルテ

高橋孝文（宮城県整肢拓桃園）

小児リハの世界では、今、生れ育っていき子どもたちが社会参加できるまでの過程で、自立に向う自律性をしっかりと身につけていくことに視点を向けた「療育のありかた」が問われている。

それを、いかに合目的々に、いかに具体的に実践するか、北九州市立総合療育センター所長の高松鶴吉博士は、抜群な学識と4半世紀にわたる療育人としての豊富な体験の蓄積をととして、その“基盤づくり”に精力的な指導力を発揮しつづけてこられた。そして、昭和53年には全国にさがけて100万都市・北九州市をフィールドとしたすべての心身障害児のための総合療育サービス体系を確立された。正に斯界のバイオニアである。

この「地域の心身障害児の福祉事業の発展への実践活動」の功績は、昭和54年の高木奨励賞、昭和58年の毎日新聞社・社会福祉顕彰を受けられたことで、とくにご理解いただければよい。

その彼が、これまでに70余編にも及ぶ小児療育に関する翻訳、著書、論文をものにされた一方で、昭和56年11月からは、時事通信社刊「厚生福祉」の「すてと」に週2回、今日まで一度も欠かすことなくウイットに富んだコラムを連載しつづけてこられた。

障害を負うこども、両親、仕事の仲間、社会事象と、取りあげられた題材はあまりにも広く、淡々と流れいく記述からは、彼の来し方の生きざまが、また、彼の哲学、人柄が彷彿し、その情熱と問いかけが身に沁みる。

今年2月、北九州市を訪れた折、奥様から「うちの主人はどちらかといえば朝型ですよ」と伺った。超人的・多端に活動されておられる彼が、いつ、どこで、この制約の多い達意の文章を書いておられるのか、早朝の静かな書斎でのダイナミックで思索的な彼の姿が目に見えよう。『もう一つのカルテ』の誕生がここにある。

今日届いた厚生福祉の「すてと」には「仁」という題がつけられていた。啓蒙と心の安らぎを感じるのは私だけではないと思う。

本書の印税はすべて親の会の活動を通して障害者戦線にまわっていくという。あらためて高松博士のお人柄がうかがわれる。

必読をおすすめする。同じ（高）より。

（B 6，頁 254，1984，¥ 1,000，福岡コロニー 刊）